

なごのがつこ日和

～ここで育てたいをシェアします～

Nago City-Elementary School Journal

2025 AUTUMN

Vol.2

安和小学校



前に名護湾、後ろに嘉津宇岳
安和岳と大自然に恵まれた
教育環境。

自然の中で地域と育む、安和小の取り組み

名護市には風土や伝統、自然などを生かした教育を進める、魅力ある学校がたくさんあります。中でも、特色のある小学校の中から6校をピックアップして、各学校の魅力をお伝えしていくシリーズ企画。

今回は「名護市立安和小学校」同校の西江剛校長、安和区の崎浜秀雄区長、勝山の岸本一郎区長、山入端区の岸本敏男区長に安和校区の取り組みや魅力についてインタビューしました。



まずは、安和小学校の紹介をお願いします。

西江校長：安和小は明治41(1908)年に屋部尋常高等小学校から分離して、今年で117年目を迎えます。山入端・安和・勝山の3区が校区で児童数は現在79人。各学年1クラスの小規模校です。学校の後ろには、嘉津宇岳と安和岳が望める自然に恵まれた環境です。子どもたちも休み時間には虫取りを楽しんだり、自然に触れながらのびのびと活動しています。

安和小学校の特徴や魅力を教えてください。

西江校長：創立100周年を迎えたときに校内に植樹した約30本のシークワーサーの木です。肥料などの手入れは子どもたちが行っており、収穫したシークワーサーは地域の企業「勝山シークワーサー」に協力していただき、子どもたちが商品開発を手がけて加工して商品化しています。

おもしろい取り組みですね。詳しく教えてください。

西江校長：学年混合で構成される縦割り班で担当する木が決まっています。班で木のお世話をしています。また学年別にシークワーサーに関する体験学習をしています。

収穫した実を使った商品化は、低学年が商品のラベルデザイン作成、3年生が「勝山シークワーサー」の工場見学、4年生がラベル貼り、5年生が勝山シークワーサーの方たちとジュレ作り体験、6年生が商品の値段設定や販売場所の提案、販売を行います。各学年で役割分担を決めて、全校で行っています。昨年は約400キロの収穫があり、ジュース、ジュレ、アンダギー、ピールの加工商品を完成させました。販売は、6年生が実際に校外に出てイベントに出店して自分たちで販売したんです。売上金は、子どもたちの校内活動費に充てています。

ガジュマルの木も安和小の特徴の一つだと聞きました。

はい。「おきなわの名木百選」に認定されているガジュマルの木と、木を囲むウッドデッキも安和小ならではのです。ウッドデッキは2020年に卒業記念で寄付を募って設置し、みんなの憩いの場になっています。最近では、地域の人による読み聞かせも木の下で行いました。今後もウッドデッキを使つての催しを考えています。

岸本一郎区長：安和小は、地域の人が積極的に授業に参加してくれるところもいいですね。子どもたちにシークワーサーの手入れ方法や、家庭科でのミシンの使い方、手作りおもちゃや籠の作り方など、たくさん教えてくれるんです。地域には手に技を持った人たちが多く、子どもたちに良い学びを与えてくださっています。

子どもたちと地域の皆さんが楽しんだり、子どもを見守ったりする取り組みもあるそうですね。

岸本敏男区長：山入端公民館では、夏休みに安和・中山・屋部に住む子どもたちを集めて、流しそうめん大会を行いました。約50人ほど集まり、学校が違う子たち同士でも楽しく過ごしていましたよ。こういった取り組みは続けていきたいと思っています。

崎浜区長：閉園した安和幼稚園の一面を使って、今年の4月に「子どもの家」を開設しました。地域の人がローテーションで放課後の子どもたちの見守りを行っています。上級生が下級生に宿題を教えたり、一緒に遊んだり、とても良い居場所になっていると思います。

安和小学校区の地域全体での今後の展望についてお聞かせください。

崎浜区長：「子どもの家」もそうですが、子どもたちだけでなく、ご家族にも安心してもらえらる地域づくりをしていきたいと考えています。また安和小では警察と小学校が連携する「交通少年団」も長年受け継がれているので、これからも子どもたちと一緒に安和小の安全や環境を守っていきたいです。



最後に、入学や転校をお考えのご家庭へのメッセージをお願いします。

岸本一郎区長：安和小を卒業した地域の人は、自然の中で目いっぱい遊んできた人たちです。時代は変われど、自然に触れる体験をすることで、子どもたちにひらめきや豊かさが生まれるはずだと思います。

西江校長：小規模校なので、学校行事でもそれぞれの児童がステージに上がったり発表したりするチャンスがあります。対応力が身に付くので、安和小を卒業した子は中学校でも堂々と人前に立つことができます。自然豊かな安和小学校で、様々な力を身につけてもらえたらうれしいです。

真喜屋小児童が自主的に学校PR、「PTCA」の導入も

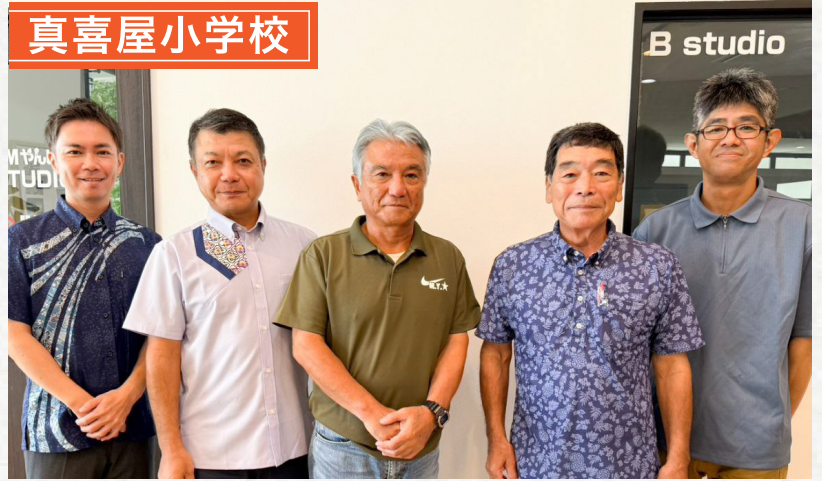
今回は「名護市立真喜屋小学校」をご紹介します。

同校の宮城敬校長、真喜屋区の小濱守男区長、仲尾次区の新城高樹区長、前PTA会長宮里巧さん、市議会議員の多嘉山侑三さんに真喜屋校区の取り組みや魅力についてインタビューしました。

宮城校長：真喜屋小学校は今年の10月1日で創立130周年を迎えました。現在は76名の児童が在学しています。校区内には、海・川・山がありとても自然豊かです。総合的な学習の時間や生活の授業では、地域の方にお世話になりながら学習を行っています。

子供たちは学年関係なくとも仲が良く、休み時間も一緒に遊ぶ姿が見られます。児童だけでなく職員も仲が良いので、アットホームな雰囲気です。

名護市の施策「名護市学校施設長寿命化計画」による校舎の改修工事があり、2学期からは新校舎での学習が始まりました。



真喜屋小学校が自慢する特徴や魅力は何ですか？

新城区長：私は1974（昭和49）年度の卒業生なのですが、当時も今も自然豊かなところが自慢です。東には源河川、西には羽地内海、南には多野岳・名護岳、北には東シナ海。校舎からは、古宇利島、伊平屋島、伊是名島も望むことができます。

宮里さん：特徴的な取り組みとして、令和5年度から真喜屋小は「PTA」から「PTCA」になりました。

「C」は「コミュニティ」のことです。保護者や先生方に加えて、地域の皆さんにも協力していただきながら学校活動を行っていくことになりました。

「PTCA」では、どのような取り組みが行われているか教えてください。

多嘉山議員：地域の人たちの「真喜屋小を守りたい」という思いから、昨年9月には「真喜屋小学校を存続させる会」が立ち上がりました。子供たちの居場所づくりを目的とした取り組み「真喜屋子どもの家」という活動を行っています。

「子どもの家」ではどのようなことをされているのですか？

小濱区長：真喜屋校区の子どもを中心に他校区の子どもたちを受け入れています。名桜大学の学生や郵便局の職員の方、コーヒー農家、地域ボランティアの皆さんなどの協力で、エコバックや服を作ったり、シャボン玉を研究したり、かき氷を作ったりと、季節に応じてそれぞれの事業者から提案いただく課題に取り組んでいます。

いつもは小学校の多目的教室で実施していて、最初は10人程度の利用でしたが、徐々に増え今では約25人が集まります。夏休みは公民館で行い、子どもたちがたくさん参加してくれました。



真喜屋小では子どもたちが学校のPR活動を行う「真喜屋の魅力探偵団」というプロジェクトがあると聞きました。

多嘉山議員：はい。2年前に6年生が自主的に立ち上げたものなんです。私が児童数の減少について市議会で取り上げた様子を、当時の6年生がネット中継で見学してくれていて、それがきっかけになり、自分たちで児童数を増やすために真喜屋のいいところを伝えていこうと発足することになりました。

それからはYouTubeの動画を作ったり学校新聞を書いたり、地域のラジオ局で番組作りに挑戦したりと活発に活動しています。

宮里さん：発足当時は6年生だけの取り組みだったのですが、今は全校生徒で取り組んでいます。魚さばき体験や源河川の探索なども行い、真喜屋小でしか体験できないことを自分たちで体験し、それを発信して魅力を知ってもらおうということをしています。

宮城校長：発足時に目標にした「5年間で全校児童を100人にし、笑顔いっぱいにする」と目指しています。これからも子どもたちと一緒に、真喜屋のいいところをこれからも発信していきたいですね。

とても楽しそうですね。最後に、入学や転校をお考えのご家庭へのメッセージをお願いします。

宮里さん：「子供たちがやりたいことができる学校にしていこう」というのが真喜屋小のスタンスです。「真喜屋の魅力探偵団」をはじめ、のびのびと活動できるような環境をPTCAが一致団結して作っています。ぜひ一緒に、真喜屋小を盛り上げていきましょう。

宮城校長：真喜屋小は、高学年の子が低学年の子を思いやる、素敵な関係が築けている学校です。子どもたちは、まずは自分たちが楽しむことを意識しながら学校生活を送っています。人や自然やにも触れながら、当校だけの豊かな体験ができると思います。職員、児童ともに仲が良い真喜屋小にぜひ見学にいらしてください。



真喜屋小で「月桃茶作り・アダン編み」体験—地域の魅力発信で

名護市立真喜屋小学校（名護市真喜屋）で8月28日、「月桃茶作り」と「アダン編み」体験が行われた。

児童数が約80人の同校は、児童数減少が課題となる中「児童数を100人に増やそう」という目標を掲げている。今回、真喜屋の魅力発信する取り組みの一環として、児童が手作りした「月桃茶」とアダンの葉で作ったコースターを地域で販売しようといわれたもの。



当日は、6年生10人が参加。「月桃茶作り」では、真喜屋地域に自生する月桃の葉で作った、朝採れの生葉を使ったお茶と1週間乾燥させた茶葉を使ったお茶、乾燥葉を水出しにしたお茶の3種類を飲み比べ、香りや味の違いを体験した。その後、月桃の葉の洗浄処理やカットをしたほか、販売用パッケージのイラスト制作にも取り組んだ。講師は「羽地古民家かめたろうやー」店主の宜志富美香さんと、月桃茶を愛飲する三好真知子さんが務めた。

「アダン編み」では、地元出身の草編み講師・大城琴紀さんを招き、コースター作りとマーニの葉でソリ作りにも挑戦。編み方を学んだ。



参加した生徒会長の多嘉山拓さんは「初めて飲んだ月桃茶は、沖縄の伝統餅『ムーチャー』のようでおいしかった。真喜屋は自然が豊かな校区。自分たちで地域の魅力を発信することで入学したいと思ってもらい、児童数を増やしたい」と話す。澤山保嵩さんは「月桃やアダンについて学び、自分の考えが広がった。僕たちが作ったものを手に取ってくれる人が笑顔になればうれしい」と話した。

宮城敬校長は「地域の良さをどう伝えるか、児童が自主的に考えて地域の人から学んでおり、こちらが驚かされることが多い。自分で課題を見つけ解決する力や自主性を育てほしい」と話す。

児童が作った「月桃茶」とアダンの葉コースターは、9月下旬から10月上旬に羽地地域で開かれた地域の豊年祭で販売した。

屋部小中山分校

歴史や歩みで卒業生が語る、屋部小中山分校



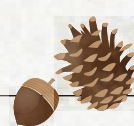
今回は「名護市立屋部小学校中山分校」をご紹介致します。同校の松田しずか校長、同校の8期卒業生で24代目校長を務めた我喜屋稔さん、同校の51期卒業生で中山区の川野圭輔区長に中山分校の魅力や歴史を教えてくださいました。

まずは、屋部小学校中山分校の紹介をお願いします。

松田校長：中山分校は1946（昭和21）年4月に『分教場』として認可を受け、同年9月に児童数80人で開校しました。今年80周年を迎えます。現在児童数は、1年生が3人、2年生が2人、3年生が1人、4年生が3人の計9人。職員は教員が3人、用務員が1人です。13人で家庭的であたたかい雰囲気の中、のびのびと学習し学校生活を送っています。

川野区長：分校という制度は、今では分からない人もいるかもしれませんがですね。本校は屋部小学校です。1年生から4年生まで分校で学び、5年生からは本校の屋部小学校に通う仕組みです。





我喜屋さん：中山区から屋部小までは山を越えて川もあり、距離は約4キロあります。1年生～4年生の児童は歩いて通うのが大変です。そこで地域で育てようと設立されたのが中山分校です。

今年創立80周年とのことですが、中山分校のこれまでの歩みや歴史について教えてください。

我喜屋さん：終戦が1945（昭和20）年、中山分校が認可を受けたのが翌年なので、戦後間もない頃に設立されています。中山区としてはもっと前から、分校が必要だという話は出ていたと聞いています。中山の地域も例外ではなく戦争の影響を受け、畑も家もなにもない壊滅状態からの設立だったようです。

川野区長：ほとんど食べものとかが無い状態から、子どもたちのために学校を作ろうと、区民が一致団結して設立されたんです。

松田校長：今回「中山分校創立50周年記念誌」を改めて読んだのですが、設立にあたっては、分校の土地の無償提供だったり、区民の労働力だったり地域の人たちの協力が記録に残っていました。地域の人たちの中山分校への気持ちを感じました。

我喜屋さんは8期の卒業生とのことですが、在学中はどのような様子でしたか？

我喜屋さん：児童数は24人でした。今と同じ複式学級で教員は2人。先生が1年生を見ているときには、2年生は自習時間になる。3・4年生も同様だったので、自習時間は上級生が下級生の勉強を教えたりと、児童間も協力し合っていてとてもよかったことを覚えています。

松田校長：当時も校長や教頭はおらず、2人で20数人を見ていたんですよ。



今と昔と比べてみて、今の中山分校の様子はどうですか？

川野区長：僕は51期卒なのですが、当時も今も、自然豊かなところは変わらないと思います。校舎の玄関に、昔の子どもたちが描いた地域周辺マップがあるのですが、植物や動物、昆虫などたくさんの自然が描かれていて、当時の子どもたちもこの自然を通して様々な体験をして学んだのだと思います。

最近、子どもたちと保護者の方から聞いた話によると、なんと音楽室に沖縄県版レッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されている「リュウキュウアカショウビン」が迷い込んできたそうです。そのくらい自然と近い環境なんですね。

我喜屋さん：鳥の声は聞こえるし、四季折々の花々は見られるし、大自然の中に校舎があるというところは、当時から変わらない、自慢のひとつですね。

「分校」だからこそその良さがありますね。

松田校長：これまでの歩みとしても、中山区民の方は学校や教育をととても大事にしてくださっています。本校と分校では人数の差が大きいですが、大人数が苦手な児童が本校からあえて分校に通っているケースもあり、少人数だからこそ「ここだったら頑張れる」という場所になっているのかなと思います。

授業は、体育は1年生から4年生まで合同で行うなど、先生も教育課程をいろいろ工夫して、授業しています。中山区民や先生の愛にあふれた中山分校を、見に来ていただけたいと思います。



名護市教育委員会より

教育委員会では、学校全体で31学級以上の「過大規模校」と1学年1学級以下の「小規模校」の教育環境の整備に向けて「名護市立学校適正規模・適正配置に関する基本方針」を令和7年2月に策定しました。「なごのがっこ日和」では、本基本方針に基づいた取組を推進する事業の一環として、各学校の特色ある教育活動や学校の魅力を発信していきます。

名護市立小規模小学校のご案内 【対象校：真喜屋小・稲田小・安和小・中山分校・瀬喜田小・久辺小】

小さな学校で
大きく学ぶ

通常、それぞれの学校ごとに通学区域があり、住所によって就学すべき学校が指定されていますが、各学年の学級数が1クラス以下の学校（小中一貫校除く）へ通学を希望する場合、住所はそのままでも指定校変更の手続きを行うことで小規模校へ通学することが可能となります。

小さいながらも大きく学ぶことができる小学校で、のびのびと学んでみませんか？



やんばる経済新聞でも
市内小学校の魅力を発信中
令和7年度 名護市立
学校魅力PR支援事業



発行責任者

名護市教育委員会 学校教育課 ☎0980-53-1212 (内線380)